
姫と破壊神

森崎優嘉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姫と破壊神

【Nコード】

N3603X

【作者名】

森崎優嘉

【あらすじ】

レイスウェイク大陸の中心に位置するミナユーイア王国。

ミナユーイア王国第一王女ナオレイア・イロール・ルク・ミナユーイアはある日、王宮に侵入してきた少年と出会う。そして何と、少年は破壊神ユーアストだった。お互いを敵視ではなく恋愛視してしまった二人、そんな二人の間にあるのは大きな壁。ナオレイアと破壊神ユーアストは大きな壁を越えられるのか？そして二人を待つ未来は……。

登場人物（前書き）

3作目です。みなさんよろしくお願い致します。

登場人物

ナオレイア・イロール・ルク・ミナユーイア 14歳

ミナユーイア王国第一王女。おとなしい性格だがたまにやんちゃな時も。

王女として教育されたがあまり王女っという感じではない。
親友のルーリスとミナリーゼが大好き。

破壊神ユースト 14歳

魔の三邪神の一人。三邪神の中でも一番の魔力を持っている。
よく散歩で人間界へ行くので、人間界にも知り合いが多い。

ユーリス・ベナ・ワータス 14歳

ナオレイアの親友。ワータス公爵令嬢だがすごく腹黒く、いつも小型ナイフを隠し持っている。

ミナリーゼ・エダ・マーブル 14歳

ナオレイアとユーリスの親友。二人にとってはお姉さんの存在だが、パニックになると暴走する。マーブル公爵令嬢。

登場人物（後書き）

まだまだ登場人物は続きます。

登場人物2

地理

アベール・ジワ・サトーレ 14歳

ナオレイア達三人の友人。ユリスにいつもからかわれている。サトーレ侯爵令嬢で、ある日をきっかけに破断神ユージアのことが好きになった。

破断神ユージア 14歳

魔の三邪神の一人。表は優男だが裏では恐怖と言われるほどの腹黒。

破罪神タツータ 14歳

魔の三邪神の一人。のんびりな性格だが怒ると怖い。ユージアの悪思考を止める係りになってしまっている。

地理

レイスウェイク大陸

北…レスヒージェ帝国

南…ナンジア王国

東…トウリウス王国

西…ザイロス帝国

中央…ミナユーイア王国

登場人物 2

地理 (後書き)

次から本文です。

1 - (1) 少女とメイド(前書き)

本編始まります。

1 - (1) 少女とメイド

部屋にはペンで書く音しかしなかった。

窓からは青空の中、鳥達のさえずりが聞こえていたがペンの音でかき消されていた。そんな部屋に紙に何かを書いている少女がいた。

彼女は13、14歳ぐらいの少女だった。

彼女の机の周りには同じような紙が山のように積み重なっていた。

少女は紙に素早く何かを書き、重ねていた。

そんな中、扉がノックされた。

「どうぞ」

少女は手を止めずに言った。誰かが入って来ても視線も紙のほうに行っていてまた、入ってきた人も気にしていなかった。

「お茶をお持ち致しました」

入ってきた人はメイドだった。そしてメイドの言葉にようやく少女は手を止め、顔を上げた。

「ありがとうございます」

少女はメイドが置いてくれたカップを持ち口を付けた。

「終わりそうですか？」

「もう少して終わりそうよ、いつも思うのだけどリアが入れるお茶はとてもおいしいわね」

カップを置きメイドはリアに微笑んだ。

「恐れ入ります。明日はルース様とミナリーゼ様がいらっしゃいますからね姫様」

「…そうね、来るまでにこの山を片付けなければね」

「お手伝い致します」

ありがとうございます、と言ってペンを持って手を動かし始めた少女にリアは紙の山を整理し始めた。

「やっと終わった」

「そうでございますね」

少女とリアは空を見た。そこには綺麗な夕焼けが見えた。

「明日も晴れそうでございますね」

「そうね」

少女はそのままずっと空を見ていた。リアはカップにお茶を入れた。そして少女はカップを口にした。

「やっぱりおいしいわね」

万遍な笑みで言った少女にリアは微笑んだ。

明日は親友が来る、そう思って少女は目を閉じた。

1 - (1) 少女とメイド（後書き）

主人公の名前が出てきませんでしたね…
次回は必ず出ることになります。

誤字・脱字があったらどんどんお申し付けください。

11(2) 恐怖のユーリス

「おはようございます、ナオレイア様」

「ん…おはよう、リア」

少女…ナオレイアはベットから降りた。部屋の窓からは朝の日差しが差し込んでいた。

今日は大好きな親友が来る日…ナオレイアはこの日が待ち遠しかった。

ミナニューイア王国王宮の食卓宮。この部屋は国王が家族との食事したいとの要望で作られた。この部屋が出来てからは国王家族が集まり食事をしている。

「ナオレイア、今日はユーリスとミナリーゼが来るのでしょうか？よかったわね」

「はい！久しぶりに会うので楽しみです」

ふふ、とナオレイアに微笑むのはミナニューイア王国王妃でナオレイアの母であるミアージェ・イロール・ルク・ミナニューイア。

「二人も喜ぶだろう、本当によかったな」

そう言うのはミナニューイア王国国王でナオレイアの父であるケンタイロス・イロール・ルク・ミナニューイア。

二人の言葉に「はい！」と元気よく返事をしたミナニューイアは二人を迎えるために「お先に失礼します」と言い、部屋を出た。

親友はすぐに来た。

「ナオ、久しぶりね〜」

「ミナリー！久しぶり！」

「…お変わりないみたいだねナオ」

「ユーリも元気でよかった」

ナオレイアは親友のミナリーゼとユーリスに抱きついた。

「…ナオは相変わらず子供だね」

ユーリスはナオレイアの頭を撫でた。

「私はもう大人だもん！」

「…14歳は、まだ子供」

「そんなこと言ったらユーリスも子供だもん！」

ナオレイアとルーリスが言い合っているとミナリーゼは苦笑いをしながらソファアに座り、リアの入れてくれた紅茶を飲んでいた。

「二人とも、もう良しなさいな〜リアがせっかく入れてくれたんだから早く飲まないと冷めちゃうよ？」

ミナリーゼの言葉にユーリスは頷きソファアに座り静かに飲んだ。

ナオレイアも渋々とソファアに座り紅茶を飲んだ。

「ところで、ユーリは相変わらずコーヒーなんだね」

ナオレイアはコーヒーを飲んでいるユーリスを見ながら言った。ミナリーゼも同じくユーリスを見た。

「ユーリス…本当に紅茶だめなの？」

ミナリーゼの言葉にユーリスはコクンと頷いた。

「紅茶だめ…コーヒーがいい」

ふ〜ん、とナオレイアは再び紅茶の入ったカップに口を付けた。

「あ、今日は夕方までここに居るんでしょう？」

「ええ、お父様が久しぶりにゆっくりしていきって」

「…私毛」

「そっか〜、じゃあまだゆっくりしていられるね」

ナオレイアが万遍な笑みをするとミナリーゼも万遍な笑みになった。
…ユーリスは相変わらず苦笑いだっただ。それを見たミナリーゼは
「ユーリス、スマイルスマイル！」
「うっ…強制しても無理だよ」
ミナリーゼはユーリスの頬をひっぱった。
「ミナ…ユーリが痛そうだよ…」
そう言いながらナオレイアは苦笑いをした。

今だに頬をひっぱるミナリーゼにユーリスの顔が変わった。

「……痛いのですけど」

ユーリスの手がミナリーゼの脇に行った。そしてユーリスはミナリーゼの脇を擦った。

「うひゃ！…！」

「お仕置き…だよ」

「ひょー！あ……きゃ！ゆ・ゆるして〜！！！！！」

擦り続けるユーリスについてミナリーゼは降参した。だがお仕置きはこれでは終わらなかった。

「…土下座しろ」

「え〜！！！」

叫ぶミナリーゼにユーリスは懐からナイフを取り出した。

（（ひっ…！））

ナイフを持ったユーリスにミナリーゼとナオレイアは青ざめた。

「土下座しないと…！すいませんでしたー！！！」

土下座をしながら謝るミナリーゼにユーリスは腹黒い笑みを浮かべていた。

（（ユ、ユーリスのドサー！腹黒ー！））

叫びたい気持ちになったが叫ぶとユーリスが怖いので叫べないミナリーゼとナオレイアであった。

1-1(2) 恐怖のユーリス(後書き)

やっと主人公の名前がでてきました！

誤字・脱字がありましたらお申し付けください。

1-1 (3) 綺麗(前書き)

遅れてすみません。

11(3) 綺麗

ナオレイアの部屋は微妙な空気が漂っていた。ナオレイアとミナリーゼは顔が青ざめていた。しかし、その原因を作ったユーリスはというと…

「ユーリス様、おかわりをどうぞ」

「ありがとうリア」

…リアが入れたコーヒーを飲んでいた。

「ナオレイア様とミナリーゼ様もどうぞ」

「あ、ありがとうリア」

「…ありがとうございます」

（（リア〜！助かったよ〜））

リアは二人の気持ちを感じ取ったのか二人に頷いた。

リアが部屋から出て行き、また3人になった。部屋は静かになり、窓からは日が差していた。ナオレイアは紅茶を飲んでいるミナリーゼと窓越しに外を見ているユーリスを見た。

（二人ともきれいだな〜）

ミナリーゼはお姉さんの存在でミナリーゼの笑顔がナオレイアは好きだ。ユーリスは途轍もなく腹黒のドSだがいつもは優しく稀に見せる笑顔はとても綺麗な。そんな二人をずっとナオレイアは見ている。

（それに比べて私は…）

ナオレイアは自分に自信が持てなかった。周りの人達は綺麗だと言っただけでナオレイアはどうしてもその言葉がお世話だと思えなかった。

ナオレイアがそう思っているとユーリスと目が合った。

「どうしたの、ナオ」

「…二人とも綺麗だなくって思ってたの。それに比べて私なんか…」
ユーリスは黙ってナオレイアを見た。

「ナオレイアも十分綺麗よ？」

「ミナリーゼはナオレイアの手を握った。」

「…」

ナオレイアは俯いた。

（私は…）

そこでずっと黙っていたユーリスが口を開いた。

「ナオ…貴方は本当に馬鹿ね」

その言葉にミナリーゼは驚き、ナオレイアは顔を上げた。

「ナオ、貴方は本当に馬鹿な人ね…どうして『綺麗』という言葉を否定するの。貴方は本当に綺麗な人よ？体も、心も…貴方にはミナユーリア王国の姫としての立派で元気な姿をしているの…なぜナオは否定するの？」

「私は…ただ…」

「ただ…何？貴方は何を望んでいるの？皆に何て言って欲しいの？この世界には綺麗な人と綺麗じゃない人がいるわ、綺麗じゃない人は奴隷になったりするの。貴方はただその人たちに同情しているだけじゃないの？」

「違う！私はこの国の姫として！国民全員の事お思っ…て…奴隷なんて言葉が消えてほしくて…」

ナオレイアは泣きながらユーリスに思いを伝えた。ミナリーゼはそんなナオレイアは抱きしめた。

ユーリスは目を閉じて何かを耐えていた。そして目を開けた。

「ナオ、貴方の考えはいい事…でも…奴隷は永遠に消えない…それに、奴隷になつてしまった人は2度と帰ってこない。一生懸命に奴隷組織を探しても出てくるのは奴隷の死体のみ…」

ナオレイアは驚いてユーリスを見た。ユーリスは悲しそうな顔をし

ていた。

「死体はみんな苦しそうな顔…それが毎日…ナオ…これが日常なの、だから…綺麗を否定しないで。貴方は本当に綺麗なんだから」

「ユリス…」

「そうよ、ナオ」

ナオレイアはミナリーゼとユリスを見た。

「うん二人ともありがとう」

ミナリーゼは微笑み、ユリスは頷いた。

まだ1日はこれから始まる。

(ナオ、貴方の力で奴隷をなくしなさい…それが皆の願いなのだから私は、もう嫌なの…奴隷達の苦しそうな死に顔を見るのが…何対葬らなくてはならないの…)

だから期待しているのよ？ナオレイア…私を思う存分楽しませてね？それが私と彼の願いだから)

1-1 (3) 綺麗(後書き)

最後の『彼』とは誰でしょうかね…

まずいです、私も分からなくなってきました！

誤字・脱字があったら言ってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3603x/>

姫と破壊神

2011年11月22日04時03分発行